

1. カワウの分類と形態

カワウはカツオドリ目ウ科に分類され、南米を除き世界に広く分布しています。日本でも、全国的に広く生息しています。

カワウの体長は約80～85cm、翼開長は130～150cm、体重は約1.5～2.5kgです。

ヒナは、黒いピロード状の産毛で覆われています。巣立ってから1年以内の幼鳥は、全体にくすんだ茶色で腹部に白い羽が混ざります。成鳥は全身褐色がかった黒色で、繁殖期になると頭部と腰部に白い繁殖羽が見られます。

また、カモなどの水鳥では3本の足指の間に水かきが2つあるのに対し、カワウは4本の足指の間に水かきが3つあります。カワウの鼻穴は、成長すると水が入らないように無くなります。このように、カワウは水中の活動に適した形態をしています。



写真T-1 カワウ

2. 食性と採食行動

カワウは魚食性の鳥です。採食時に潜水する深さは水面から1～9.5mで、長いときは70秒程度潜ると言われています。

採食量は、飼育下で一日当たり330g、多いもので400～620gの記録があり、野外では体重の26.2%との報告があります。

琵琶湖のカワウが食べる魚は、春は多くの種類がありますが、夏はハスとアユで占められます。秋はオオクチバスが多く、ブルーギルやオイカワなどもみられ、1月から3月にかけては、オオクチバスやウグイの割合が大きくなります。

ねぐらから採食地の距離は、10～20km程度のごとが多く、行動時間帯は昼間に限られ、おもに早朝の2時間で採食するようです。

またカワウは、季節によって採食する水域を変えており、琵琶湖のカワウは、最長で熊本県まで移動したことが確認されています。



写真T-2 カワウ (ヒナ)

3. 県内のカワウの生息状況

県内のカワウはおよそ2月から10月にかけて生息し、3月から8月にかけて繁殖活動を行います。

1920年代から1940年代にかけて、ウ類は全国に分布していましたが、環境の悪化により激減し、県内では戦後から1970年代にはカワウはほとんど確認されていませんでした。1982年に竹生島で5巣の営巣が確認された後、1990年代に入って爆発的に増加し、県内で、2008年秋には7万5千羽が生息していました。

県内の主な生息地は、大規模なコロニー(集団営巣地)が、長浜市の竹生島と近江八幡市の伊崎半島にあります。2017年5月の調査では10のコロニーと1のねぐらが確認されています。



写真T-3 カワウの営巣活動に伴い樹木枯死が進んだ竹生島 (2008年7月)

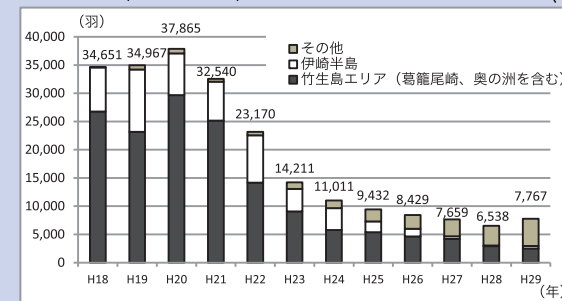
4. カワウの被害と対策

カワウの生息数が極めて多いことから、採食行動により琵琶湖や河川の漁業に大きな被害が出ています。また、竹生島や伊崎半島では、巣作りのための枝折りや糞害により樹木が枯死するなど植生被害が出ています。このような被害を防ぐため、河川では防鳥糸の設置などで採食を防止し、大規模コロニーでは、銃器駆除によって人とカワウが共生できる程度まで、カワウの数を段階的に減らしています。また、花火や鳴り物による追い払いなどもされています。

その結果、2017年5月の調査では、県内の生息数が7800羽程度まで減少し、竹生島では、植生の回復も見られるようになりました。



写真T-4 営巣数の減少に伴い植生回復の徴候が見られた竹生島 (2016年9月)



◀図T-1 カワウ春期生息数の推移
自然環境保全課